

第 2 回 「徳山あすかのロシア生活」

2 週間連続！

Санктペテルブルク弾丸旅行

年末、モスクワから Санктペテルブルクに 2 週間連続で週末旅行に行ってきました。1 回目はウズベキスタン関連のイベントに参加するため、2 回目はマリインスキー劇場でバレエ「くるみ割り人形」を観るためでした。寝台列車の旅が大好きなので、2 回とも、モスクワ発着の夜行列車を利用しました。昔はロシア鉄道と言えば、目的地の都市の名前がついた駅から出発するのが普通でした。例えばクルスクに行くならモスクワのクルスク駅から、 Санктペテルブルクに行くならレニングラード駅から列車が出ていたものですが、最近では全く無関係の駅から出ることの方が多いです。ヴォストーチヌイ駅という新しい駅もでき、そこからはロシア中の全方面に長距離列車が出ています。

私が特によく乗っているのは、モスクワのキエフ駅を午前 1 時に出発する Санктペテルブルク行きの列車です。これだと仕事が終わってからも余裕を持って乗れますし、出発時刻が遅く、使っている車両も古いので、だいたい空いています。お値段も最安値で、およそ片道 5000 円です。

ウズベキスタン・スルハンダリヤ州との知られざるつながり

ウズベキスタンの友人から、 Санктペテルブルクの孤児院や老人ホームで慰問事業をするので、来ないかとお誘いがありました。だいたいウズベク人は直前に誘ってくるので、考える間もなく「行く」と即答しました。ちょうど日本で、中央アジア 5 か国の首脳と日本の総理大臣が一堂に会する「中央アジア+日本」が開催される直前のタイミングでした。そのこともあって、慰問事業を取材すれば、日本人にウズベキスタンについて知ってもらうのにちょうどよい機会だなという目論見もありました。

この慰問事業は「 Санктペテルブルクにおけるスルハンダリヤ州の日」というイベントの枠内で行われました。私の友人は、ウズベキスタンの中で最南端に位置するスルハンダリヤ州の民間企業で働いています。その会社と、スルハンダリヤ州政府が合同で事業を実施。 Санктペテルブルクの孤児院の子どもたち 900 人に、新年を控えてのプレゼントが贈られました。その翌日には老人ホームで、スルハンダリヤ産の家具を贈呈し、伝統音楽や歌、ダンスが披露されました。

この老人ホームは普通の老人ホームではありません。「ベ



Санктペテルブルクの夜景

テラン・労働の家」という名前前で、その名の通り、第二次世界大戦・大祖国戦争時に、従軍経験にかかわらず、様々な形で国のために働いていた人がたくさん入居しています。そしてその方達は、ほぼ漏れなくレニングラード包囲戦を生き延びています。レニングラード包囲戦と言えば、1941 年 9 月 8 日から 1944 年 1 月 27 日まで続きました。町をナチスドイツ軍に囲まれ、300 万人の市民のうち 3 分の 1 が飢餓で命を落としたとも言われています。

当時、レニングラードの子どもたちはウズベキスタンに集団疎開しました。スルハンダリヤ州では、そのうち 5000 人ほどを受け入れました。スルハンダリヤは年中太陽が輝き、とても暖かく、レニングラードとは真逆の気候です。そのような場所で青春時代を送った子どもたちの中には、両親を失って帰る場所がなくなってしまった人もいます。その子どもたちはそのままスルハンダリヤに残りました。現地で仕事を見つけた人もいれば、結婚した人もいます。ウズベキスタンの他の都市でも、もちろん避難者を受け入れました。首都タシケントには、レニングラードの子ども達を記憶にとどめるための記念碑が昨年オープンしました。

ホームの入居者は圧倒的に女性が多かったです。私は手持ちのウズベキスタンの民族衣装を着て行ったので、ウズベク人に間違われました。ハグされながら「サマルカンドは素晴らしいところだわ」とか「あなたの国は素晴らしい」などと褒めてくれるので、最初は日本人だと言い出せずに申し訳ない気持ちになりました。高齢のロシア女性たちにとって、ウズベキスタンの文化は、ノスタルジーを感じさせるものようです。皆、口々に、いつどこで誰と、ウズベキスタンのどの町を訪問したかという話で盛り上がっていました。

タシケントから来た女性歌手のマルジョナさんは、素晴らしいロシア語で、昔のヒット曲や、 Санктペテルブルクをモチーフにした歌を次々披露し、拍手喝采でした。タシケントでは公立学校においてロシア語で教育を受ける人が多く、マルジョナさんもそうだったそうです。ただし最近では、英



マルジョナさんや入居者、職員の方々と

語が選択できる場合は英語を選ぶ人が多数派です。いっぽう、スルハンダリヤのような地方では外国語で学べる学校がそもそも無いことが多いです。

慰問事業の締めくくりは、カザンと呼ばれる大鍋で作った熱々のプロフ（チャーハンのようなウズベキスタンの郷土料理）です。カザンは建物内に持ち込めないため、マイナス 10 度の中庭で調理を行い、真っ白の湯気の中から羊肉の塊が姿を現しました。肉や野菜、米、飾り付けのうずらの玉に至るまで、必要な材料は全てウズベキスタンから運んできたという気合いの入りようです。

元旦に 100 歳の誕生日を迎えた
エメリヤノワさん

私とマルジョナさんは、食堂で、アンナ・エメリヤノワさんという入居者の女性と同席させてもらい、一緒にプロフを食べました。エメリヤノワさんは、なんと 1 月 1 日に 100 歳になるというのです。ロシアでは事前のお祝いは不吉と考える人が多いため、後日、新年になってからお祝いのメッセージを送りました。エメリヤノワさんは耳が遠いですが、自分でしっかりと歩けますし、新聞を読み、ロシアや世界のニュースもチェックしています。引退する前は教職に身を捧げたということで、非常に知的な女性です。

知事不在のレセプション

慰問事業の翌日、川沿いの素敵なイベント会場で、スルハンダリヤ州のレセプションがありました。要するに、サンクトペテルブルクとスルハンダリヤの関係を強化するため、偉い人たちが集まるパーティーです。友人のコネで私も招待状をもらったため、非日常を体験してきました。招待状には「18 時開始」と書いてありました。大雪で、少し遅れて到着したため、急いでコートを預けようと思ったら、なぜか他の人の上着がほとんどかかっていません。中に入ると準備のスタッ

フと、数人の日本人がいるのみ、という謎の状況でした。今のロシアにおける日本人社会はかなり狭くなっているため、ほとんどの人が知人でした。

そこで判明したのが、実はもともと 18 時開始予定でしたが、19 時 30 分に変更になったとのこと。しかし私の分も含め、日本人の招待状は誤って訂正前の時刻を記載して発送してしまったというのです。きっちりした日本人ですから、皆さん少し前に到着しており、結局 2 時間近くも待つことになりました。もう皆さん慣れているのか、「ウズベクだからね」とにんまり。その分、思いがけず日本人同士でおしゃべりする時間ができました。



来場者にふるまわれたドライフルーツ

ようやく宴が始まりました。テーブルの上にはぎっしりと馳走が並んでいます。冬のロシアでは新鮮なフルーツはとても高価なので、苺がキラキラ輝いて見えます。スルハンダリヤ州のレセプションですから当然主催者は州知事です。私は以前、何度か州知事に取材したことがあったため、会えるのを楽しみにしていました。知事は前日の夜に、ロシア入りしているはずでした。しかし乾杯の挨拶をしたのはテルメズ大学の学長で、知事の代わりに挨拶文を読んでいるではありませんか。関係者にこっそり聞いてみると、なんと知事は確かにサンクトペテルブルクに到着したのですが、そのタイミングでミルジヨエフ大統領に呼び出され、飛行機から出ることなく、そのままウズベキスタンへ戻っていったというのです。自分が主役のイベントにも出られなくなるのは驚きです。開始時刻の間違ひには笑っていた日本人のメンバーも、こればかりは「さすが色々な意味でウズベクだ」と逆に感心していました。

神戸ラーメン…と思ったら高知！？

ちなみに 1 日目の夜、私はラーメン屋を開拓しに行っていました。私の出身地は神戸市なのですが、地図を見たら神戸ラーメンというお店がオープンしているではありませんか。これはなんとしても試さねばと閉店間際にギリギリで駆け込みました。席についてワクワクしていると、そこには高知大学の大学案内 2025 年度版がありました。そしてトイレに目をやると、暖簾には坂本龍馬が描かれています。これはまさ

か、神戸と高知を間違えたのかも？との疑念が私の胸をよぎりました。漫画「ドラゴンボール」をモチーフにしたと見られるイラストがたくさん飾ってありましたが、店名以外、神戸らしいところは全くありません。運ばれてきたラーメンは、麺はいまいちでしたが、スープもトッピングも美味しく、満足しました。次の機会に、店名の謎を解き明かしたいと思います。



ペテルブルグの「神戸ラーメン」

遠征する価値あり！マリインスキー劇場

バレエが大好きな私の最近の悩みはチケット代が高すぎることです。モスクワのポリショイ劇場でくみ割り人形を見たいと思っても、12月中旬の段階で残っているチケットは、公式サイトで4万5千ルーブル、およそ9万円というとんでもない価格です。ちなみに、もっと早く買ったからといって安いわけではありません。高く見やすい席と、お手頃価格だけれど見にくい席が先に売れ、中途半端な席が残るのです。サンクトペテルブルグのマリインスキー劇場は、バレエのレベルは同じかそれ以上でありながら、半額以下です。交通費を入れても、結果的に安くつきます。

私はキャストが出揃ってからチケットを買いたいタイプで、「推し」であるファースト・ソリストの永久メイさんが主役を務める日に日帰りで行くことにしました。いつもは1階席を買いますが、年末年始のくみ割り人形のシーズンは予算的に厳しいので、最上階の中央に近い席を取りました。最上階は、中央から離れれば離れるほど、舞台の見切れがかなり大きくなるので、注意しなければなりません。



最上階の座席から見た舞台

私の隣の席には白髪のご婦人が10歳くらいの男の子と一緒にやってきました。おばあちゃんとバレエ鑑賞なんて素敵だなあと微笑ましく思っていると、男の子はおとなしく観ているのに、おばあちゃんの方が、開演後もずっとスマホをいじっています。メッセージャーでメッセージを送ろうとするものの、老眼で文字が見にくいようで、暗闇の中でレンズを近づけたり離したりしています。最初は私も我慢していましたが、舞台に主役が出てきてそれを続けていたので、さすがに声をかけることにしました。

最初は丁寧に、やめてもらえるよう「お願い」しました。するとおばあちゃんは「気にするな！私じゃなくて舞台を見ろ」と反論してきました。こういうタイプにはビシッと行ってあげないといけないので、同じくらいのトーンで「注意」したところ、ようやくスマホをしまいました。

ロシア語というのは本当に表現の幅が大きく、今までの経験上、相手と同じくらいのレベルの丁寧さ、あるいは乱暴さで会話をすると、こちらの希望が聞き入れられることが多いです。ちょっと話がそれますが、ロシア人に要望を述べているのに無視されるという場合は、舐められているということなので、ちょっと強い表現を使うくらいでちょうどいいかもしれません。

今までマリインスキー劇場でこんなことはなかったのでもっと残念に思いましたが、せっかくのバレエ鑑賞ですから、気持ちの切り替えが大切です。幕間には劇場のショップに寄りました。ここの接客はいつも気持ちがよく、お目当ての2026年のカレンダーも買えたので、満足しました。バレエはもちろん素晴らしかったです。



サンクトペテルブルクの夜景

サンクトペテルブルクはロシア生活の一年目に住んでいたこともあり、私にとってモスクワの次に馴染みがある町です。ただし、当時の辛い思い出が蘇るので、数日単位で遊びに行く位にとどめておくと、純粹に町の良いところのみを楽しめる気がします

(とくやま・あすか/モスクワ在住ジャーナリスト)

≪ 投稿 ≫

ウズベキスタン一人旅で感じたこと

井上 智隆(静岡県在住/旅行好きの会社員)

2024/9/21~27 にかけて、ウズベキスタン(タシケント、サマルカンド、ブハラ)を一人旅しました。日本で事前に予約したのは飛行機、ホテル、高速鉄道、一部送迎で後は自由気ままに散策しました。連日快晴で、気温も高すぎず、旅行するには良い時期だったと思います。

2018 年にロシア(モスクワ、サンクトペテルブルク)を旅行しており、旧ソ連地域は 2 回目です。その他、ドイツなどヨーロッパ諸国も 2014~2019 年に旅行したことがあるため、ロシアやヨーロッパ諸国との比較を交えながら記載します。

【ウズベキスタンの感想】

ウズベキスタンは「旧ソ連構成国」ではあるものの、ソ連時代の名残やロシアの影響を感じる場面は地下鉄の構造や使用する配車アプリなど僅かでした。ロシア モスクワではソ連時代の名残として、レーニン像や「鎌と金槌」のマークを街なかで見かけますが、ウズベキスタンでは見かけませんでした。また、サンクトペテルブルクで見かけたような帝政ロシア時代の様式のような建物もいくつか見かけはしたものの、説明が少なかったです。逆に、資料館などではタイムル朝やシルクロードを始めとする中央アジアで栄えていた時代の展示や説明が多く、この時代を大切にしている印象でした。旅行前、今なおソ連の名残があるという勝手なイメージを持っていましたが、ソ連との精神的な決別、「ウズベキスタン」としての独自の歴史・文化を大事にしている姿勢を感じました。

街の雰囲気

皆さんとてもフレンドリーで、今まで旅行した国の中で一番良かったと感じます。ヨーロッパ諸国では物乞いや不審者から声をかけられることが多く(ただし旅行者によりけりでこのような経験のない人もいます)、場所の確認などで立ち止まることもはばかれる状態でした。ウズベキスタンではそのようなことはなく、(子供も大人も)笑顔で挨拶までしてくれました。

中でも印象的なのは、ブハラの観光地から離れた所にあるプロフ屋さんでの出来事です。「SHOXPALOV」というお店で、Google マップの口コミで高評価だったので配車アプリを使って行きました。家族経営のお店でしたが、日本人が珍しかったようで、店員が色々話したそうでした。しかし、お互いの共通語がなく(相手は英語を話せない)、かろうじて聞き取れる地名やジェスチャー等でコミュニケーションを図りました。当時、翻訳アプリの使い方もよく分かっていなかったため、意思疎通は難しかったです。しかし、帰り際、店にいた経営者の子供も含めて、手を振ってお見送りをしてくれました。その際、先ほどの店員が何か言っていたのですが、ジェスチャーから想像するに、おそらく「また来てね」と言って

いたのではないかと思います。このようなことは初めてで、とても心温まる経験でした。

ロシアに行ったときにも感じたのですが、旧ソ連地域ではヨーロッパ諸国で受けたようないわゆる人種差別を受けませんでした。ソ連時代を含めて、昔から様々な民族が共生しているからでしょうか。

私の周りでも、「旧ソ連地域は怖い」というイメージを持たれている方は多いです。日本人だけでなく、東南アジアの方も同様のことを言います。しかし、実際はそんなことはなく、「百聞は一見に如かず」という言葉がピッタリだなと感じます。

【その他】

意外にも日本人観光客が多かったです。彼らの多くは団体ツアーかガイド付きでしたが、Google マップと配車アプリ(Yandex Go; 英語にも対応)を使えば、個人旅行でも問題なかったです。公共交通機関があまり整っていないため、基本的にタクシー移動ですが、料金も安く(近場だと 70 円、30 分走っても 500 円程度)、ドア to ドアになるため、他の国のように電車やバスを乗り継ぐ場合と比べて観光はしやすかったです。ただし、ウズベク語はラテン文字、ロシア語はキリル文字を使いますが、場所によっては配車アプリの表示やお店のメニューがキリル文字(ロシア語)表記しかないことがあり、個人旅行であれば、キリル文字が読める状態にしておいたほうが良いと思います。私はロシア旅行のためにキリル文字を独学したのですが、その経験が役立ちました。



サマルカンドの郷土史博物館

元は 19~20 世紀に建てられた旧 Russian-Chinese Bank だそうです。外観・内装共に銀行というより宮殿のようで、ロシアのエカテリーナ宮殿やエルミタージュ美術館を彷彿とさせます。中の展示は、シルクロード(織物)関連でした。

ブハラ市内にある城壁



街を歩いていたときに見つけた城壁です。アルク城の西側にあり、Google マップでは「Wall of Bukhara」と書かれています。ブハラは全体的に、アニメのアルスラーン戦記を彷彿とさせる風景でした。訪問した 3 都市の中で、ブハラがお気に入りです。